

第5回 + 第6回
10月16日 &
17日

2008年 途上国経済講義

後期集中 山崎圭一 (横浜国大経済学部) (株) 済川 109

連絡 横浜市資源循環局の保土ヶ谷工場への見学ツアーを企画しています。11月7日(金曜日)の14時に現地集合です。

このハンドアウトは、いろいろな質問への回答です。質問は、配布するレジメに貼り付けてあります。

中国に限らないですが、途上国の環境問題が深刻です。わたしは今、ブラジルのある公害弁護士に、ブラジルの公害裁判の論文をかいてもらっていて、日本語にわたしが訳して、公表する予定です。タバコ産業の農薬汚染で、農場の労働者に自殺が多いのです。ある労働者が立ち上がり、裁判を提起して、勝利されました。中国については、相川泰先生が詳しく、彼の近著『中国汚染』(ソフトバンク)では、「癌の村」が100もあると紹介されています。ちなみに日本も60年たつて、水俣病が未解決です。

相続税に着目するのは、おもしろいですね。相続税を高くすると、次世代に「機会均等」が保証され、社会の競争状態が持続します。相続性を安くすると、富豪は富豪のまま、次世代の貧富格差が広がり、社会の底辺が競争から脱落します。すると社会全体の競争は、かえって弱まります。

汚職の問題は、わたしはTI-J (Transparency International Japan) の設立理事として、取り組んでいます。分析は精緻に成りつつあります。一言で汚職といっても、種類が多く、また対象も、行政、司法、国会(議会事務局と政治家)、公企業、外郭団体と多様です。

日本もたいへん腐敗していますが、特徴として指摘できることは、行政の腐敗、政治家の腐敗がひどいのをたいして、司法とくに裁判官がクリーンであることです。裁判官を買収したという話は皆無だと思えますが、これは世界的には珍しい。日本について、自慢できることの1つです。

株式市場の未発達という観点も、途上国をみる場合に、たいへん重要です

CO2となると、気候変動枠組み条約つまり地球温暖化防止の条約ということになります。1992年のリオデジャネイロでの「地球サミット」で採択され、その後各国で批准されました。具体策はCOP(締約国会議)に委ねられ、COPではインドやブラジルが、いつも「先進国は先に発展して、さんざんCO2を出してきたのに、これから発展する途上国にCO2削減をもとめるのは、不公正だ」と主張し、結局「京都メカニズム」からは途上国の義務がなくなりました。さて、これをどうみるか。

ポーランドは、あまり考えたことがありませんでした。また教えてください。アイルランド経済(後進国の代名詞だった)の急速な発展への言及は、よく文献で見かけますが。

これは例の映画『ダーウィンの悪夢』ですね。わたしもDVDでみましたが、わたしは実はあの映画にはかなり批判的です。アフリカを否定的に描きすぎていると思われまます。むしろ、批判されている内容については、その通りでしょう。批判そのものには、100%同意しますが、「アフリカを描く」という観点からは、もう少し多面的であってよいかと。

City of God あれはすごい映画でした。監督のWalter Sallesさんは、まだ若いですが、すごい映画をつくりまます。彼を育てたブラジル映画界は、指導者の層が厚い。その重鎮に、故Roberto Santos監督がおられます。その息子さんはコンピューター科学者で、20年来の親友ですが、監督はよくサンパウロの日本人街で日本のTVや映画をみて、そのなかから、小津や溝口や黒沢もみて、学んでおられたそうです。

通貨危機は全世界で、最近だけで、200以上発生したとも、言われています。規制強化で、抑制するほかありません。